

テモテへの手紙第二章「世を去る最後のことば」

1A 御国の王の現れ 1-8

1B みことばの宣教 1-5

2B 競走者への義の冠 6-8

2A 苦しみの時の友 9-22

1B 独りになったパウロ 9-18

1C 離れた者と共にいる者 9-15

2C 共に立つ主 16-18

2B 真実な同労者たち 19-22

本文

ついに、テモテへの手紙の最後の章に来ました。テモテ第二の手紙の4章です。パウロは、ここではっきりと、「私が世を去る時が来ました。」と明言しています(6節)。第一回目の、皇帝の前での弁明が既に終わっています。そして、わずかな弟子たちが近くにいる中で、環境が劣悪な、貯水槽の跡を使った、マルティヌスの牢獄にただ独り、います。つまり、死ぬ前の最後のパウロの言葉をここで読めるのです。

彼の思いには、テモテに、福音を宣べ伝え、みことばを教える働きをしっかりと行うことがまず、ありました。多くの悪い働き人がいる中で、それを完徹するのは困難でした。それでも、行うように厳命します。それから、自分自身のところに急いで来てほしいとテモテにお願いします。死が近づいている彼のところには、今まで共に働いてきた者たちが見捨ててしまったからです。パウロの最期は、あたかも主イエスご自身のように見えます。主は、ご自身がその使命を全うする時に、弟子たちが見捨ててしまいました。しかし、パウロには、そのイエスご自身が自分のそばに立ってくださっているのを知っています。私たちも、主に倣う者たちとして、パウロの最期の言葉から多くを学び、心に留めたいと思います。

1A 御国の王の現れ 1-8

1B みことばの宣教 1-5

¹ 神の御前で、また、生きている人と死んだ人をさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現れとその御国を思いながら、私は厳かに命じます。

パウロは、以前にも、テモテに対して、厳かに命じたことがありました。長老が罪を犯したという告発が成された時に、何かしらの判断を下さないといけません。「I テモ 5:21 私は、神とキリスト・イエスと選ばれた御使いたちの前で、あなたに厳かに命じます。これらのことを先入観なしに守

り、何事もえこひいきせずに行いなさい。」同じように、神の御前で、さらに、生きている人と死んだ人を裁かれるイエスの御前で、パウロは命じています。パウロは、テモテを一気に、主権者であり、王である神とキリストの裁判席の前に、一気に連れてきているのです。

私たち、キリスト者にとっての危険は、恐れ多い主がおられて、この方がすべてのことを裁かれるという意識が薄れることです。主への恐れがなくなることです。そのために、世の思い煩いや、罪の中に容易に陥っていくし、人を恐れて罅に陥ることがあります。しかし、私たち人間すべてが、あらゆることを裁かれる主の前に立たなければいけないということを、恐れおののきをもって知らないといけません。(ヘブル 4:13 参照)

そして、キリストが・イエスが、「生きている人と死んだ人をさばかれる」方であることを、パウロは教えています。イエス様は、ダニエルが預言したメシア、人の子であることを福音書で明言しておられますが、ご自身が来られると、人々はよみがえり、それぞれご自身が裁かれることを語っておられます。「ヨハ 5:28-29 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」

これは、死んだ者たちがよみがえって、裁きを受けることを語られたものですが、「生きている人」をもさばかれる、とパウロは言っています。これは、主が来られる時に、すでに主にあって死んだ人たちのみならず、生き残っている人々もいるからです。マタイ 25 章を見ますと、主が地上に戻って来られて、その栄光の御座の前に、すべての国の人々が集められることを宣言しておられます。「マタ 25:31-33 人の子は、その栄光を帯びてすべての御使いたちを伴って来るとき、その栄光の座に着きます。そして、すべての国の人々が御前に集められます。人の子は、羊飼いが羊をやぎからより分けるように彼らをより分け、羊を自分の右に、やぎを左に置きます。」右により分けられた羊は、御国を受け継ぎます。左により分けられたやぎは、悪魔とその使いのために用意された永遠の火に入ります。

このような裁きがあるのですから、神を恐れるのであって、人を恐れてはいけないことを、イエス様は弟子たちに教えられました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」

しかし、主の裁きには、二つの種類の裁きがあります。一つは、イエスを信じず、罪の赦しを拒んだので、憐れみなき裁きです。黙示録 20 章で、一人一人が、陰府からよみがえり、白い大きな御座で、それぞれの行いに応じて裁かれて、火と硫黄の池に投げ込まれる裁きであります。

もう一つは、イエスを信じている者たちに対する裁きです。こちらは、自分が信仰によって生きて来たことに対する、褒美としての裁きです。当時のローマ社会で、競技者は、賞を得る時に、皇帝や総督のところまで階段を上って行き、月桂樹による冠を受けます。同じように、信仰者は、その信仰の歩みにしたがって、それぞれが主ご自身から賞賛としての報い、労苦に対する慰めとしての報いを受けます。「I コリ 4:5b 主は、闇に隠れたことも明るみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのときに、神からそれぞれの人に称賛が与えられるのです。」ただし、これは清めのための裁きとも言えます。つまり、主のために行ってきたと言いながら、不純な動機で行ったのであれば、火の中を通るようにして救われるので、木やわらで作ったものは燃え尽くされます。愛を動機として、信仰によって行ったことだけが報酬として残り、金や銀のようであり、精錬されて、その真価に応じて、報いを受けるのです（I コリ 3:10-13 参照）。

そして、「その現れとその御国を思いながら」とあります。主が天から現われ、御国を地上に立てられます。そして王の王として君臨されるのです。その栄光の御座において、先ほどマタイ 25 章を読んだように、主はすべての国の人を裁かれるのです。そして、もう一つ、「現れ」という言葉には、信者たちのための現れもあります。天から降りて来られて、死んだ者はよみがえり、生き残っている私たちは、いっしょに引き上げられ、空中で主とお会いするのです。（I テサ 4 章）そして、信者のための審判、つまり一人一人への賞が与えられます。タラントの喩えにあるように、「よくやった。良い忠実なしもべだ。おまえはわずかなものに忠実だったから、多くの物を任せよう。主人の喜びをともに喜んでくれ。」とあります（マタイ 25:21,23）。

このことこそが、私たちが正しく主に仕える、心の動機になります。奉仕をするとは、人に対してではなく、人からどう見られているか？ではなく、もっぱら主人であるイエス様にどう見られているか？で、思い計るものです。そして、この方を喜ばすのです。ですから、主が教会のために戻って来られるという希望は、私たちに忠実に仕える動機付けと知恵と力を与えるのです。

²みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。忍耐の限りを尽し、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。

テモテに対して、パウロは何度となく、みことばを教えることを励まし、また命令しました（I テモ 4:13 など）。ここでは、「みことばを宣べ伝えなさい。」と言っています。「宣べ伝える」とは、ローマ社会では、皇帝からの伝令を運んでいく者たちが、その伝令を宣言する時に使っていました。主権者であり、全権者からの伝令ですから、何一つ、それらの言葉を違えることなく、まっすぐに宣言しなければいけません。それが、御国の王であられる、キリスト・イエスから、私たちが任されていることなのです。（マタイ 28:18-20 参照）

そして、「時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。」と命じています。時が良い時には、宣べ伝え

るのは容易ですが、悪かったとしてもやりなさいと言っています。要は、忠実に、忍耐してやっ
きなさいということです。「**忍耐の限りを尽くし**」と言っているのです。主人からほめられるのは、ど
んな時にも、同じように仕えているしもべです。主イエスご自身が、忠実な賢いしもべとして、こう語
っておられます。「**マタ 24:45-46** ですから、主人によってその家のしもべたちの上に任命され、食
事時に彼らに食事を与える、忠実で賢いしもべとはいっただれでしょう。主人が帰って来たとき
に、そのようにしているのを見てもらえるしもべは幸いです。」

それで、「**絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい**」と言っています。教えるのも、絶えず
教えます。第一の手紙では、「**これらのことに心を砕き、ひたすら励みなさい。**」と命じています
(4:15)。そして、「**責め、戒め、また勧めなさい**」であります。これは 3 章からの続きです。「**Ⅱテ
モ 3:16** 聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。」
聖書をしっかり教えるのは、その教えがあり、そして、自分が欠けたところが明らかにされます。だ
から、戒めがあるのです。そして、正されて、義の訓練です。

責めるとは、はっきりと、過ちを指摘することです。真理によって、私たちの罪や隠しているもの
が明らかにされます。例えば、ある時に、キリスト者が、他のキリスト者を本当に憎んでいるの
を感じたことがありました。しかし、ヨハネ第一の手紙に、こう書いてあります。「**3:15** 兄弟を憎む者
はみな、人殺しです。あなたがたが知っているように、だれでも人を殺す者に、永遠のいのちがと
どまることはありません。」私は、カルバリーチャペル・ジャパン・カンファレンスで、ヨハネ第一の 3
章が担当になっていました。よりによって、こんな箇所をどうして教えなければいけないのか？と
思いました。しかし、ここを、まっすぐに教えざるを得なかったのです。

そして、戒めます。過ちを指摘して、そうであってはいけないことを教えます。それから、勧めます。
勧めるのは、励ます、慰めると言ってよいでしょう。ですから、責めて、戒めて、そして勧めるとい
う順で、人々が義の訓練を受けるのです。

³ というのは、人々が健全な教えに耐えられなくなり、耳に心地よい話を聞こうと、自分の好みにし
たがって自分たちのために教師を寄せ集め、⁴ 真理から耳を背け、作り話にそれて行くような時代
になるからです。

聖書を、まっすぐに教えて行くことによって、健全な教え、つまり敬虔に生きる、力と知恵が与え
られます。健全とは、健康であり、また汚れから免れている状態を指しています。しかし、それに耐
えられなくなる時代に来ているということなのです。3 章では、終わりの日は困難な時代になり、自
分だけを愛することがその特徴であることを学びました。自分の心が責められることを、ひどく嫌
います。憎しみます。

そこで、「耳に心地よい話を聞こう」とするのです。そして、「自分の好みにしたがって自分たちのために教師を寄せ集め」とありますが、エペソの教会で、これが実際に行われていたでしょう。しかし今、SNS の時代、これがいとも簡単にできてしまいますし、していることでしょう。自分が導かれた教会で、キリストに立てられている教師を通して養われることを拒み、自宅のパソコンやスマホで、自分の好みで、この教師が良い、あの教師が良いと、選り好みして、それが霊的生活だとみなすのです。

そして結果として、どうなるのか？「真理から耳を背け」ようになる、とあります。ここで大事なのは、聖書の言っている真理とは、単に法則や定理のようなものではないということです。「真理はイエスにあるのですから。(エペ 4:21)」とあります。イエスご自身に人格をもって触れます。イエス様に触れるのですから、私たちは心砕かれます。自分の内にある不純物に気づきます。しかし、それに耳を背けるのです。そして、「作り話」に逸れて行きます。エペソにいる悪い働き人たちは、言葉だけで「ああだ、こうだ」と言い回し、現実のともなわない議論を延々としていました。全く、実を結ぶことのない話です。

⁵ けれども、あなたはどんな場合にも慎んで、苦難に耐え、伝道者の働きをなし、自分の務めを十分に果たしなさい。

テモテに対しては、どんな場合にも、まず「慎んで」ということがあります。慎むとは、神の恵みによって自分に与えられた召しに留まるということです。それ以上のことを行わないし、それ以下にもならないことです。これが結構、難しい。自分に与えられた分を越えて、いろいろやることを肉は欲するからです。そして、苦難に耐えます。テモテには、いろいろな悪い働き人がやってきて、ああだ、こうだと言ってきます。作り話をしているような者たち、また真理に背くような者たちがいます。こうした苦難に耐えます。それで、伝道者の働きをなします。テモテにとって、みことばを教える、牧者としての働きもあり、そして、みことばを宣べ伝える、伝道者としての働きにも召されていました。そのようにして、自分の務めを十分に果たすのです。

2B 競走者への義の冠 6-8

そして、基本、似たような召しを受けていたパウロが、テモテにとっての模範になります。パウロは、「この福音のために、宣教者、使徒、また教師として任命されました。(1:11)」とっていました。彼が、この使命を全うしたと明言しています。

⁶ 私はすでに注ぎのささげ物となっています。私が世を去る時が来ました。

これから、皇帝ネロによって斬首刑にされます。しかし、パウロはそれを、「注ぎのささげ物となっています」と言っています。神に対して、注ぎのささげ物は、いくつかの箇所で見つけることができ

ます。まず、ヤコブが天からのほしごの夢をベテルで見て、そしてベテルに戻ってきました。「創 35:14 ヤコブは、神が自分に語られた場所に、柱を、石の柱を立て、その上に注ぎのぶどう酒を注ぎ、さらにその上に油を注いだ。」とあります。そして、モーセの時代、幕屋を建てた後で、祭壇に毎朝、毎夕に献げる全焼のいけにえとともに、ぶどう酒四分の一を注ぎの供え物としてささげることが書かれています(出エジプト 29:40)。自分自身が、その注ぎのささげ物になっているとみなしています。ネロに首を斬られるということに、主ご自身のみこころをパウロは知っていたのです。

「世を去る時」です。ここの元々の意味は、天幕から杭を抜くことです。ペテロも、同じくローマで殉教したのですが、第二の手紙で「私はこの幕屋を間もなく脱ぎ捨てることを知っています。」とあります(1:14)。パウロにとって、死ぬことは、そのまま主のところに行くことでした(ピリピ 1:23)。そして、今の肉体が滅びることは、天からの建物である、復活のからだを受け取ることでした(Ⅱコリ 5:1-4)。死が終わりではなく、むしろ、主の元に行き、しかも、この肉体から復活のからだを受ける希望を持つ時なのです。

⁷私は勇敢に戦い抜き、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

パウロはこれまで、走るべき道のりを走っている渦中にあることを告白していました。彼が一回目にローマで鎖につながれている時は、こう言っていました。「ピリ 3:12-14 私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして追求しているのです。そして、それを得るようと、キリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。兄弟たち。私は、自分がすでに捕らえたなどと考えることはありません。ただ一つのこと、すなわち、うしろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスにあって神が上に召してくださるという、その賞をいただくために、目標を目指して走っているのです。」しかし、今や勇敢に戦い抜きました。そして、走るべき道のりを走り終えました。

ここに焦点に定まっている人は幸いです。自分の前には、自分にだけ与えられている道のりがあります。他の誰でもなく、神が自分に示された道程です。そこを走ります。そして、終わりは、キリストご自身に見えるという栄光です。この終わりを思って、それから今を生きているでしょうか？

そして、「信仰を守り通しました」と言っています。初めに福音を信じて、そして福音を信じて生きる、福音を信じて全うするのです。「ヘブル 3:14 私たちはキリストにあずかる者となっているのです。もし最初の確信を終わりまでしっかり保ちさえすれば、です。」初めは良いスタートを切ったのに、ゴールにまでたどり着かないのではなく、スタートを切って、ゴールをいつも見据えるのです。9節以降に、最後まで走らなかった同労者の姿を見ます。これは悲惨です。信仰によって始まったことはすばらしいですが、はるかにすばらしいのは、信仰によって終わることです。

⁸ あとは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。私だけでなく、主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。

信仰によって生きることの結果は、主からの義の栄冠であります。信仰によって義と認められた者たちは、その義を主が再び来られる時に手にします。「ピリ 3:9 キリストにある者と認められるようになるためです。私は律法による自分の義ではなく、キリストを信じることによる義、すなわち、信仰に基づいて神から与えられる義を持つのです。」自分では、決して神の義に達することはできません。パウロとて、だれであっても、自分の努力で神の義に達しないのです。そうではなく、神の義は賜物として、終わりの日に、イエス様が戻って来られる時に与えられるのです。だから、熱心に主の現れを待っています。

そして、「その日には、正しいさばき主である主が、それを私に授けてくださいます。」と言っていますが、これは、自分が今、皇帝ネロという裁き主によって裁かれようとしていることを意識しているのだと思います。自分は罪人のように裁かれるが、その日には、正しい裁き主が、その義の栄冠を授けてくださいます。こんなにも、人間の裁きから自由にされていました。パウロは、コリントの教会の人たちに、こう言いました。「I コリ 4:3-4 しかし私にとって、あなたがたにさばかれたり、あるいは人間の法廷でさばかれたりすることは、非常に小さなことです。それどころか、私は自分で自分をさばくことさえしません。私には、やましいことは少しもありませんが、だからといって、それで義と認められているわけではありません。私をさばく方は主です。」

そして、この栄冠が、パウロが何か特別な人間だから与えられるのではないことを、見ましょう。「主の現れを慕い求めている人には、だれにでも授けてくださるのです。」であります。主の現れを慕い求めていますでしょうか？キリスト教会で、主の現れを求めない傾向があることを憂えます。ここではっきりと、主が戻って来られることを慕う人々には、信仰の結果である義の栄冠を受け取ることができると言っているのです！これこそが、私たちキリスト者のまことの終活です。

2A 苦しみの時の友 9-22

次から、パウロの人間としての求めがあります。それは独房で、独りになっている時に、他の人が必要だったということです。

1B 独りになったパウロ 9-18

1C 離れた者と共にいる者 9-15

⁹ あなたは、何とかして早く私のところに来てください。

パウロがテモテに、急いで自分のところに来てくれるように願っています。しかも、21 節には、

「何とかして冬になる前に来てください。」と言っています。冬になると地中海の船が航行しなくなるからです。そして、冬になると寒くなるので、外套も持ってくるようお願いしています(13 節)。彼は私たちと全く同じように、寒さを感じるし、そしてテモテという、自分にとっての信仰の息子を欲していたのです。

私たちはとかく、パウロのような、主に大きく用いられた器を見ると、その人は自分の弱さとは無縁の人だと思ひ込みです。なにか、霊的なことが、超人的なことだと思ってしまうのです。いいえ、ヤコブが手紙の中で、雨を降らせないように預言したエリヤが、「私たちと同じ人間」と言っています(5:17)。そして、人は、友を必要としています。人と人のつながりを欲しています。「いや、私にはイエス様がいるから、イエス様だけで十分だ。」という人は、偽っています。神ご自身が、父、子、聖霊の交わりをもった、ひとりの方なのです。

そして、人としてのイエス様が、弟子たちが近くにいてほしいと欲していました。ゲツセマネの園におけるイエス様の言葉を思い起こしましょう。「マル 14:32-34 さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。」イエス様は、弟子たちをそばに連れて来て、そこにいるように言われました。遠くに離れてほしくなかったのです。さらに、ペテロと、ヤコブ、ヨハネを、自分の近くに引き寄せました。そして、少しだけ離れて、父なる神に祈られたのです。祈る時は、父なる神だけなのですが、それでも、ご自身が苦しい時に、仲間が近くにいてほしかったのです。

しかし、その苦しい時に、これまで共にいた者たちが離れてしまうという、悲しい現実があります。

¹⁰ デマスは今の世を愛し、私を見捨ててテサロニケに行ってしまいました。また、クレステンスはガラテヤに、テスはダルマティアに行きました。¹¹ ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。

パウロの手紙には、手紙の最後になると、いろいろな人たちの名前が出てきます。生身の人々が、パウロと共に数多く付き合っていたことを思い起こすことができます。そこにある人間模様を見て行くと、私たちに多くのことを教えてくれます。

デマスが、「今の世を愛し、私を見捨てて」しまったとあります。彼は初め、パウロから「同労者」であると呼ばれました。ピレモンへの手紙 24 節には、「私の同労者たち、マルコ、アリストタルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。」とあります。コロサイ人への手紙では、「4:14 愛する医者

のルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと書いています。」とあります。デマスとルカが並んでいるので、おそらく二人が共に働いている期間はかなり重なっていたのだらうと思います。このルカは、福音書を書いたルカであり、また使徒の働きを書いたルカでもあり、彼の宣教旅行に同伴していました。そして事実、デマスもルカもローマにいました。11 節に、「ルカだけは私とともにおります。」と書いています。ローマに来て、今の世を愛してしまい、テサロニケに行っていました。

彼こそが、まさに、「走っていたけれども、最後まで走らなかった」例です。キリストの現れを慕って、義の栄冠を得るのではなく、今の世を慕ってしまいました。

しかし、クレスケンスとテトスは、福音の働きのために出て行ったのだと思います。ガラテヤは、今のトルコ、エーゲ海のアジア地方の東、内陸に入ったところにあります。ガラテヤ人への手紙のガラテヤ地方です。そして、テトスはダルマティアに行きましたが、これは、マケドニアの北にあるイルリコ地方(ローマ 15:19)の町です。今のクロアチアに位置します。

そして、デマスとは対照的なのがマルコです。パウロは、「私の務めのために役に立つ」から、一緒に来てくださいとテモテにお願いしています。マルコは、一度、パウロを見放した人なのです。ヨハネはマルコの別称ですが、マルコの母は、ペテロが牢屋から救い出されるために弟子たちが祈っていた家の持ち主です。エルサレムにある、その家を開放していました(使徒 12:12)。そして、バルナバのいここです(コロサイ 4:10)。

アンティオキアからの第一次宣教旅行で、バルナバとパウロは、マルコを連れて行っていました。初め、キプロス島に行きました。それから今のトルコ、アナトリア半島に上陸しました。ところが、こうあります。「使徒 13:13 パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」宣教の苛酷さからなのでしょうか、まだ若かったからでしょうか、彼は気持ちを変えてエルサレムに戻って行ってしまったのです。それでパウロがバルナバと共に、第二次宣教旅行に行く時、バルナバと、マルコのことで激しく対立しました。そして、バルナバはマルコを連れて、パウロはシラスを連れて別れたのです。(使 15:36-40)

しかし、パウロは、いつまでもマルコを役に立たない者としなかったのです。どのような変化があったのか、マルコが変わったのか、あるいはパウロが変わったのか、いや、どちらの心にも主が働きかけたのでしょう、変わりました。そして、今は、自分の務めのために役に立つと書いています。以前、別れてしまったからといって、もう共に働けないということではありません。

¹² 私はティキコをエペソに遣わしました。

パウロが、ティキコをエペソに遣わしたのは、テモテに代わって、彼がエペソの諸教会の監督が

できるようにするためです。そうすることで、テモテがローマへの旅に向かうことができるようになるためです。

ティキコは、パウロにとって頼りになる人でした。彼はアジア出身の人で、パウロの旅に同行していました(使徒 20:4)。パウロの一回目のローマでの投獄の時に、エペソ人への手紙と、コロサイ人への手紙を携えていかせています。手紙を持っていくだけではなく、そこの人々をティキコが励ますためです(エペソ 6:21、コロサイ 4:7)。そして、次の手紙、テトスへの手紙では、テトスをクレテ島での働きから離れて、ニコポリスにいるパウロと時間を過ごさせるために、ティキコを遣わしています(テトス 3:12)。

¹³ あなたが来るとき、トロアスでカルポのところに置いてきた外套を持って来てください。また書物、特に羊皮紙の物を持って来てください。

テモテがローマに行く旅で、してほしいことを具体的に指示しています。トロアスは、パウロが、初めての欧州への宣教旅行に行く時の、船出した港町です。エペソから約 300 キロ北にあります。そこに、カルポの家に外套を置いていました。冬、マルティヌスの牢獄は非常に寒くなることが考えられるからでしょう。そして、外套など、衣服は今の私たちのように簡単に手に入るものではなく、十字架のイエス様の衣を、ローマ兵たちがくじ引きにして、古着屋に持って行って売ろうとしていたほどです。希少なものでした。

そして、彼は牢獄で、非常に時間があります。書物を欲しました。羊皮紙のものと言っています。当時は、書物について新しい技術がありました。それまでは巻物でした。けれども、エジプトのナイル川の葦から取れた、パピルス紙がありました。けれども、黙示録の七つの教会に出てくる、ペルガモンでは、新しく羊皮紙を発明したのです。それで英語では、羊皮紙をパーチメント(parchment)と言いますが、ペルガモンの名称から来ています。彼は元々、ガマリエルの下で非常に熱心に学んだ、律法の学徒でした。牢獄にいる時も、しっかりと聖書の学びをしていきかけたのでしょうか。また、彼自身が手紙を書いたりする時の羊皮紙も必要と思ったのかもしれませんが。彼は、主のみことばを、死の直前まで語ろうとしていましたから。「2:9 この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながられています。しかし、神のことばはつながれていません。」

¹⁴ 銅細工人のアレクサンドロが私をひどく苦しめました。その行いに応じて、主が彼に報いられます。¹⁵ あなたも彼を警戒しなさい。彼は私たちのことばに激しく逆らったからです。

トロアスに彼の外套があり、そして、ここでアレクサンドロが彼をひどく苦しめたという言葉から、もしかしたら、次のことが起こったのかもしれませんが。アレクサンドロが、彼を酷く非難して、非難しただけでなく、ローマ当局に指名手配されていたパウロを通報したのではないかととも考えられま

す。そして、トロアスで捕まえられたので、自分の持ち物を持っていくことさえできなかった、というシナリオです。そして、ローマでパウロが第一回の法廷に出た時に、原告側の証人になって、パウロを訴えた可能性すらあります。そんなことは、多くの人に知られていなかったと思われます。何食わぬ顔で、キリスト教会の中にいるのかもしれませんが。ですから、テモテにだけは知っておいてもらい、ローマに来てからも警戒していなさいと言っているような感じがします。

そのような者に対して、パウロは罵り返しませんでした。「その行いに応じて、主が彼に報いられます。」と言っています、つまり、悪を悪で返すのではなく、裁きを主に任せたのです。

2C 共に立つ主 16-18

¹⁶ 私の最初の弁明の際、だれも私を支持してくれず、みな私を見捨ててしまいました。どうか、その責任を彼らが負わせられることはありませんように。

パウロの周りには、いろいろな働き人がいましたが、彼がローマに連れて来られて、最初の法廷の時、恐れからでしょう、パウロをみなが見捨ててしまいました。後から何人かが戻って来たと思いますが、その時には、誰もいっしょにいなかったのです。しかし、責任が負わされないようにと、執り成して祈っています。ここは、まるでイエス様のようなようです。パウロとの違いは、イエス様は前もって、弟子たちが見捨てることを知っておられました。ゼカリヤが既に預言しているぐらいですから。しかし、ペテロのために前もって執り成して祈り、彼の信仰が亡くならないようにされていますし、イスカリオテのユダ以外は、他の弟子たちも同じです。

¹⁷ しかし、主は私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。こうして私は獅子の口から救い出されたのです。

午前礼拝でじっくり学びましたので、ぜひそちらを、録音、録画したものを聞いてください。パウロは、イエス様から前もって、ご自身を証しするにあたって、多くの苦しみを受けると言われていました。コリントにおいて、夜に主が幻に表れて下さり、ここには多くの選びの民がいるから、恐れずに宣べ伝えなさいと励まされました。そしてエルサレムで騒動が起こり、彼が牢屋に入れられた時も、夜にそばに立たれて、エルサレムで証したように、ローマでも証ししなければいけないと励まされました。

そして、ここの一回目の弁明の時、仲間がみな自分を見捨ててしまった時、主が共に立ってください、力を与えてくださったのです。皇帝ネロの前に立っていた時、とてつもない強いご臨在に、パウロは囲まれていたことでしょう。イエス様は、使徒たちに約束されていました。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明し

ようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」法廷に出る時は、主の証しを立てる機会になることを予め教えておられました。

ですから、この死刑にされる法廷においても、パウロは、むしろ、みことばが余すところなく宣べ伝えられて、すべての国の人々がみことばを聞くことになるという、最後の務めであるとみなしていたのです。当時の知られた世界を支配していたローマの皇帝の前で証しするのですから、みことばが広がる効果は、絶大でしょう。そして、「こうして私は獅子の口から救い出されたのです。」と言っていますが、これは、第一回目の出廷ですぐさま死刑になることなく、今もこのようにして生きていることに、主の救いを感じているのだと思います。獅子とは、ローマの国家権力そのものであるし、その背後にいる悪魔の存在であります（Ⅰペテロ 5:8-9 参照）

¹⁸ 主は私を、どんな悪しきわざからも救い出し、無事、天にある御国に入れてくださいます。主に栄光が世々限りなくありますように。アーメン。

パウロがここで言っている、「悪しきわざ」とは、殺される事ではありません。これから殺されるのですから。福音の働きを妨げる悪しきわざのことです。今、皇帝の前で福音を伝えられているのであり、福音を妨げる悪しきわざから免れているのです。

そして、「無事、天にある御国に入れてくださいます」と言っています。御国とは、主が現れて、地上に立てられる御国のことがあります。ダビデの末裔としてキリストが治められる、回復した地です。けれども、それだけでなく、天に父なる神が座しておられ、その右にキリストが座しておられる天も、御国と呼んでいます。そこにすぐにでも、入ることを彼は安心しているのです。今、天における希望ではなく、天が地に降りてくる希望なのだという神学があります。これは間違いです。天が地に降りてくる御国もありますが、神の御座がある天に引き上げられることも、私たちの希望です。

2B 真実な同労者たち 19-22

「主に栄光が世々限りなくありますように」と頌栄をした後に、同労者たちへ挨拶をします。

¹⁹ プリスカとアクラによろしく。また、オネシポロの家族によろしく。

プリスカとアクラは、以前はパウロの助け手でした。コリントで初めて出会っています。ローマからやって来ていて、天幕作りの同業者でした。そしてエペソに行き、パウロの前に主に仕えていた人々です。アポロにより正確な道を教えたのを思い出してください。そしてローマ人への手紙の、パウロの挨拶に登場します。今は、エペソに戻っているのでしょうか。テモテを助けているようです。

そしてオネシポロは、エペソの人ですが、ローマの牢にいるパウロを捜し出してくれた人です

(1:16-17)。兄弟が苦しんでいる時に、共にいた友です。その家族は、オネシポロの不在の中で多くの犠牲を払っていたのでしょう。

²⁰ エラストはコリントにとどまり、病気のトロフィモはミレトスに残して来ました。

エラストは、コリントにおける市の会計係でした(ロマ 16:23)。コリントの遺跡には、彼の名が記された石が残っています。その彼が、パウロの旅に同行する者となり、パウロがエペソに留まっていた時に、テモテと共にマケドニアに遣わしたことが、使徒の働きに書かれています(19:22)。テモテは、この手紙をパウロが書いている時に、エラストがどこにいるのかわからなかったため、ローマにいっしょにおらず、コリントに留まっていること伝えてあります。

そして、「トロフィモ」ですが、ティキコと同じくパウロに同行していた中で近いです(使徒 20:4)。そして彼がパウロと共にミレトスにいた時に、病気だったので彼を残したとパウロは言っています。パウロでも癒すことのできなかったのです。彼は多くの癒しを行いました、癒しの賜物というのは、主の憐れみと主権のみによって行なわれたことであることが、ここで分かります。そして福音宣教者には、このような病が付き物と言ってもよいかもしれません。

²¹ 何とかして冬になる前に来てください。ユブロ、プデス、リノス、クラウディア、そしてすべての兄弟たちが、あなたによろしくと言っています。

先にお話したように、地中海を航行する船は冬になるとなくなります。ですから、冬になる前に来てほしいと切望しています。最後に、ローマにいる兄弟たちからの挨拶を書き記しています。

²² 主があなたの霊とともにいてくださいますように。恵みがあなたがたとともにありますように。

手紙のしめくりです。主が、あなたの霊と共にあるように。それから、恵みがあなたがた、つまり、エペソの教会の人々にあるように、ということです。主の働きを、死ぬ直前のパウロから任されたテモテでした。このようにして、私たちは、次の世代の人々に任せて行く務めをになっています。自分だけでなく、これから救われる人々、もう救われた人々に伝えて行くのです。